
白珠蚕（はくじゅさん）

雪村星依子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はくしゅうたん
白珠蚕

【Nコード】

N6780M

【作者名】

雪村星依子

【あらすじ】

帝に献上された白珠蚕の絹衣。真っ白に輝く雪原のような生地に、銀の糸で吉祥を願う文様が丁寧に刺繍され、見る角度によって七色に変化するとともに美しい着物。しかしそれには帝を想う娘の切なる願いが秘められていた――。

ホラー要素をプラスしてみた恋愛短編です。

農民だった少年は手にした鍬くわを剣に持ち替えて、乱れた世を正す志を胸に戦に出た。

少年の恋人である養蚕娘ようさんむすめは彼の人の無事を祈り、帰りを待ち続けた。

一年、五年、十年と月日が流れ――、やがて二十年目、少年は乱世を収め、帝みかどになった。国を安定して治めることに時間を取られ、故郷に帰ることはなかった。

平和になってから数十年、帝は后と子供達に囲まれて余生を幸せに暮らしていた。

帝の許もとには各地から献上品が毎日のように届く。この日帝の関心を引いたのは、美しい絹の着物だった。

真っ白に輝く雪原のような生地、銀の糸で吉祥を願う文様が丁寧に刺繍され、見る角度によって七色に変化する、とても美しい着物である。帝はこれをいたく気に入り、献上した者を労おうとした。「とても美しい着物だ。どのようにして作られたのか？」

献上者は年若い娘で、帝を畏おそれて終始顔を伏せたまま、鈴の転がるような愛らしい声で答える。

「絹は蚕かいこの繭まゆから取られます。この蚕はわが一族の長にしか育てられない貴重な蚕で、白珠蚕はくじゆたんと言います。蚕は蛹になるための揺籃ゆりかごを作ります。それが繭です。蚕は口から糸を吐き出して繭を作ります。一本の糸を途切れさせぬよう長く吐いて、形作るのです。白珠蚕のつくる繭は真珠のような輝きを持つのが特徴です。繭が出来るとそれを丸ごと煮てほぐします。ほぐれた糸を紡ぎ、布を織ります。蚕を育て、繭を作るところまでは姉が、織り上げた布に私が刺繍を施し、仕立てました」

帝はそれを聞いて感心した。

「なるほど、姉妹の共作であるか。刺繍の美しさもさることながら、生地元となった糸からにしても美しいのだから、このような芸術品が出来るのであるな。そなたと、その蚕を育てたそなたの姉を是非労いたい」

娘は困惑した。

「畏れながら……姉を帝に会わせることは出来ません」

「何故か？」

「その者はすでに亡くなっているのです」

帝はひどく残念がった。

「こんなにも素晴らしいものを生み出す者が、すでにこの世にいないとは。なんと残念なことか」

「贈り物を帝に褒めていただいて、姉はきっとあの世で喜んでいることでしょう。姉の望みは、帝がそれを着てくださることです」

「では、大切に着させて貰おう」

帝のあたたかな言葉に、娘は落涙した。

「ところで、煮出した蚕も貴重であると聞く。なかでも白珠蚕は幻の霊薬と聞くが……」

帝の問いに、娘は暫く考え込んで、

「その通りです。死んだ白珠蚕は長命の秘薬になります。もし帝がお望みでしたら、そちらも献上する用意がございます」

「おお、そうか」

帝は娘の言葉に喜んだ。

娘は従者に霊薬の入った白い壺を運んでこさせ、帝に献上した。

そこで初めて娘は伏せていた面を上げて、言った。

「亡き姉も、きっと喜びます」

懐かしさを覚える顔であったが、帝はその時は気にもとめず、娘に褒美を与え下がらせた。

霊薬を服用し、白珠絹で作られた着物を纏^{まと}う間、帝は不思議な体験をした。着物を献上した娘が傍に寄りそう幻を見た。これはどう

いうことなのか。しかし、その娘が傍に居ることはとても懐かしく、心落ち着くのだった。帝はこの懐かしさはどこから来るのだろうと記憶を辿った。そして、帝はかつて少年の頃に愛を誓い合った養蚕娘を思い出した。

「思い出したぞ。そう言えばあの娘はあの人にそっくりだった。あの娘は、あの人の妹なのか。ああ、しかし、私はどうして今まで忘れていたのか。思い出して会いたいと思っても、死んだのでは叶わないではないか」

帝は愛した少女の死を悼んで号泣した。

帝は偲ぶ想いが強まって、慰めのために娘を再び参内させた。

「私は将来を誓いながら、そなたの姉を迎えに行けなかった。彼女の最期を覚えてくれないか」

娘は頷き、

「姉は長い間貴男様あなたを待ち続けていましたが、風の便りに貴男様のご立派な身分になられたことを知ると、もう自分の手の届かぬ雲の上のお人になってしまったのだと嘆き、病に伏してしまったのです。しかし、姉はどうしても貴男様のお傍に戻ることを願ったのです。そうして姉は命がけで貴男の許に戻ったのです」

帝の絹の着物をじつと見詰めるのだった。

「白珠蚕というのは、実は天界の秘術です。村では秘密にされてきましたが、私達の一族は天人の血を引いています。しかし、人間にそれを悟られぬよう術を封印してきたのです。姉は禁忌を破って自らに術を施したのです。つまり、姉は自ら糸を吐いて繭玉を作ったのです。そして貴男の身を包む衣となって、望み通り貴男のお傍に居るのです」

帝は吃驚びっくりして立ち上がった。

「何！ では、私が靈薬として飲んでいたのは……、まさか、まさか！」

「はい。煮込んだ姉の亡骸なきがらです。姉は貴男に取り込まれ、貴男と一体になったのです」

帝は戦慄^{せんりつ}して、腰が抜けてしまった。

「そんな……、では、私はあの人を、自分の為に死なせ、あの人を

――」

身に纏い、食べていたのか。

「帝。怖れないで下さい。姉は、それで喜んでいるのです。貴男と一つになって、今度は貴男が死ぬまで一緒なのですから……」

娘は慰めるように言って、その身を霧で包んだ。霧は帝の衣の銀の刺繍に吸い込まれた。なるほど、衣は本当に姉妹の共作であったのだ。

長命を得た帝は、その後千年の間世に君臨し、永く安寧をもたらした。

人々が帝に謁見すると、その傍らには笑顔の美しい姉妹の姿があったという。

（後書き）

愛する人と一つになりたいという純粋な願いを描いたつもりが、弟には大爆笑されてしまいました。ギャグのつもりではなかったのですが…。

読み手の感覚次第でどうとでもとれる作品なのでしょうか…。

ご意見ご感想があれば、お気軽にお寄せいただけると嬉しいです。

メール：info_uranometria_mond.jp）

↓@）

WEB拍手：http://clap.webclap.com/clap.php?id=ginkembunko(1000文字まで投稿可)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6780m/>

白珠蚕（はくじゅさん）

2011年3月14日22時10分発行